

〔問題提起〕

生活・日常・世相—変化を捉えるために

岩本 通弥
IWAMOTO Michiya

はじめに—問題の枠組み

二日にわたる日中韓の国際シンポジウム「何気ない日常/変わりゆく日常—なぜ考え、いかに把握し、どう記録するのか」の、おおよそその問題枠組みを、まずは俯瞰的に設定しておきたい。アメリカの日本思想史の泰斗、ハリー・ハルトゥーニアンは、その著『歴史の不穏—近代、文化的実践、日常生活という問題』（こぶし書房、2011年）の中で、戦間期、世界の多くで日常性、Everydaynessが問われた意味を問いかけている。

第一次世界大戦から第二次世界大戦の間の1920年代~1940年代に、ドイツ・ロシアをはじめ西欧で、そして日本で、社会編成を攪乱し変革をもたらす日常性という問い（概念や思想）が切実な意味を持ち、それに対峙しようとする学者が同時多発的に続出したと説いている。資本主義的近代化の展開で、消費文化がまさに爛熟しようとした時代、一方ではボルシェビキ革命によって、大衆が自分たちの日常性の歴史を構築し、表現する能動性=エージェンシーを持ちうることを証明した時代でもあった〔ハルトゥーニアン 2011：5〕。ヴァルター・ベンヤミンやゲオルク・ジンメル、ボリス・アルヴァートフ、マルティン・ハイデガーらが「日常という神秘」に迫ろうとしていたのに少し遅れて、この日本でも今和次郎の考現学や戸坂潤の『風俗と思想』（三笠書房、1936年）が現われたこと¹を指摘し、ジークフリート・クラカウアーの『サラリーマン』（1930年）〔クラカウアー 1979〕に対置するかのよう、青野季吉の『サラリーマン恐怖時代』（先進社、1930年）が著され、ホワイトカラー階級の窮状を民族誌的に報告するなど〔ハルトゥーニアン 2011：54-55〕、それらはグローバルな資本主義やモダニティの展開の一側面であったことを解き明かしている。その同時代性において、柳田國男らの民俗学という学問も、同じまなざしの中から産み出されたとし²、その連関的な思想史上のパノラマの中で把握される。

さまざまな流れに通有していたのは、ハルトゥーニアンによれば、「失われた質的な時間を救い出し、科学と資本によって損なわれた直接的な主体的経験を、知の形態として復権させよとする努力」だったという〔ハルトゥーニアン 2011：6〕。近代資本主義のイデオロギーを特徴づけていたものは、ベンヤミンの言葉では「均質で空虚な時間」〔ベンヤミン 2015：61〕（「歴史の概念について」1940年）であったが、西洋以外の地域にとってのモダニティ（近代）³を、日本を実例に取り上げたハルトゥーニアンが、ベンヤミンを超える理解として力説したのは、均質ではなく、近代資本主義の中心と周辺の間不均等を包括したグローバルな同時代システムだった。その認識はマクロな構造論⁴であるよりも、産業化や都市化が進展していくミクロな場面での生活経験

とその言説であり、それは不均等発展の中での資本主義の生きられた経験であって〔樹本 2011：276〕、それらを彼は「日常性」と名づけたが、日本以外の非西洋でもそれは発動している。

1. 「生活」一対象/生活変化と生活改善

1. 比較史的観点から見た生活改善運動

本シンポジウム第I部の「生活」では、対象として生活変化と生活改善を取り上げ、1920~30年代に日中韓ではほぼ同時発生的に胚胎し、戦後それぞれに展開していった生活改善運動/新生活運動を、沖縄⁵・台湾⁶を含む東アジアの比較研究から、その同時代性と異質性を視野に入れつつ、戦後の日常史的な生活変化をふまえて相対化することを目的とする。

日本では一般に、これらの運動は戦後、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の指導で始まり、農業改良普及員や生活改良普及員⁷がファシリテーターとなったものとして捉えられている⁸。しかしながら、1934年に蒋介石の提唱した新生活運動が、衣食住行の改革から強国家化を目指したり、内地に先駆けて生活状態調査⁹の実施された植民地下朝鮮で、総督府の上からの教化政策に対抗し、朝鮮日報社の主導で1929年、生活改新運動¹⁰が勃興したように、比較対照史的な観点を交えることで、その運動をより鳥瞰的・複眼的に議論していくことも可能となる。

身の回りの日常を変革する動きは、例えば戦後の韓国ではセマウル運動への底流となっていくが、日本でも1941年の『国民礼法』では起居動作が細かく規定される。異質性はあるのはもちろんとして、そのパラレルな傾向性は見て取れる。取るに足らない、身の回りの些細な「生活」を焦点化する、こうした運動が人びとの日常に攪乱的で、少なからず対象的な日常に革命的な影響を与えたのは確かだろう。

2. 多領域における生活改善運動への着目

近年、生活改善運動/新生活運動に関して、民俗学のみならず、多様な学問分野で、研究が蓄積され始めた。私たちの研究グループの淵源である田中宣一編『暮らしの革命—戦後農村の生活改善事業と新生活運動』（農文協、2011年）とほぼ同時に、日本近現代史の大門正克編『新生活運動と日本の戦後一敗戦から1970年代』（日本経済評論社、2012年）が刊行されたのをはじめ、中国近代史においても深町英夫『身体を躰ける政治—中国国民党の新生活運動』（岩波書店、2013年）は、段瑞聡『蒋介石と新生活運動』（慶應義塾大学出版会、2006年）以来の大著として新境地が拓かれている¹¹。

日本の生活改善運動/新生活運動が、先の2冊の題名に見るように、戦後農村における事業や運動を専ら指すのに対し、1934年に蒋介石による新生活運動が、1955年鳩山一郎首相の主唱による新生活運動と、名称のみが一致するだけかのような無理解が、残念ながら支配的である。中国や韓国、植民地期の朝鮮・台湾での生活改善運動や、戦後沖縄のそれを合わせ見ると、これらが東アジア近代に共有するモダニゼーションの一連の動きであったことが理解される。本シンポジウムの特色は、各国の運動を別個視せず、東アジア近現代の中で相対化する点にあるが、日本では生活改善運動とは一般に、この総理府系の新生活運動協会の新生活運動と、GHQの農村改革の一環として、農村民主化のため1948年に始動する農林省系的生活改善普及事業を合わせ呼ぶのが通例である（ただし、改善の現場には両者の区別はない）。

戦間期になされた文部省の生活改善事業を含めたり、類似の事業を展開した内務省の民力涵養

運動や、1932年からの農商務省の農山漁村経済更生運動も内包させる場合もあるが、その場合、文部省の外郭団体だった1920年設立の生活改善同盟会が概してその起点と看做される。服装、食事、住宅から社交儀礼まで生活全般に関わる改善と合理化を目指されたものであったが、都市の中流層(新中間層)の住居生活の改善が主たる対象にまなざされており[久井 2004、2012]、前記2書の戦後農村のそれとは乖離しているかのように捉える向きもある。

一方、例えば産業組合中央会等の官製団体も、類似の事業を展開しており、また府県や市町村が直接的に改善事業に取り組んだり、生活改善のための半官半民の団体を組織する例も多く、経済学者森本厚吉が1922年に設立した文化普及会のように、生活改善運動を民間ベースで行う例も多数存在した[久井 online]。さらには生活改善同盟会以前にも、勤儉力行や虚礼廃止などを唱えた、報徳社運動や町村是調査運動・地方改良運動を、同じ傾向の運動と見ることも不可能ではない。このように生活改善運動の「外延」を決めることは難しいが、ここではLifeやLebenといった西欧語の翻訳語として近代日本語に登場した、「生活」という言葉¹²の本質を含意したい。

3. 「生活」への焦点化と「普通の人びと」の日常の変革

「生活」とは、基本的には生存して活動すること、また生き延びるために行う多様な活動を指すが、生き長らえるにしても、その「生」の質が問われるようになって、初めて多用された概念が「生活」であった[森本 1921: 4、中寫 1974、1975]。近世語の類語は、渡世・生業・活計^{なりわい}などであったが、それらが生存して生き長らえるための、生計の糧や手段、また誕生から死に至る人の生涯を「練」的に捉える観念でしかなかった。

第一次世界大戦後に内務省が主導した民力涵養運動¹³は、五大要綱の一つとして「勤儉力行ノ美風ヲ作興シ生産ノ資金ヲ増殖シテ生活ノ安定ヲ期セシムルコト」(傍点筆者)を掲げたが、地方改良運動でも強調された儒教徳目である「勤儉力行」だけでなく、「生活」という言葉を使用した点が着目される。従前までの観念論ではなく、現実の人びとの暮らしを直視し、改良可能な客体として認識され始めたとき、初めて実体的な姿が浮かび上がってくる。別な言い方をすれば、大戦後の本格的な工業化と都市人口の激増で「生活難」が問題となった大都市居住の新中間層、いわゆるサラリーだけで暮らす俸給生活者の登場が、「生活」という新概念を用意させたのであり[岩本 2011]、家計調査や国勢調査など「生活」を計量的に分析する技術を適用する一方、それらの手法とは対照的な、「生活」をまるごと把握するディシプリンとして、いずれの国でも民俗学が誕生してくる[バウジンガー 2005: 95]。柳田の三部分類が「生活外形/生活解説/生活心意」であり、『明治大正史世相篇』(以下、世相篇)の最終章が「生活改善の目標」である点は示唆的である。本シンポジウムでは民俗学のこのような初発の問いかけの意義を重視したい。

「普通の人びと」の「生」を高めようとするこうした動きの中で、肝要なのは、民衆自らもそれに主体的に取り組み、日常実践を繰り返していった点にある。植民地下朝鮮において総督府の教化政策に対抗した、朝鮮日報社主導の生活改新運動や東亜日報社のヴ・ナロード運動などは、その典型であるが、上からの施策だけでは人びとの生活はそう容易には改まらない。日露戦後の地方改良運動でも、風俗改良で、盛んに虚礼廃止や旧暦の改廃、衛生観念の普及などが唱えられたが、さほど進展せず、次の時代の運動に委ねられたように、「普通の人びと」による住民主体的なその創意と良識を交えた生活実践運動であった点を確認しておきたい。その消費志向を先取りし促進する形で、初めて変革は実現する。農林省の農業改良普及員や生活改良普及員は、あくまでファシリテーターであって、また戦後日本の生活改善運動を「参加型開発」の模範例とみなす開発経済学や開発人類学において、開発途上国での農村開発に応用している成功例をみても、動かすのは

あくまで「住民」の内発的な有り様であり、高度経済成長を果たした日韓中の発展の基礎にも、その土台を準備した「普通の人びと」の能動的で、ヴァナキュラーな実践があったことを見逃してはならない。

4. なぜ、日常習慣の改善だったのか？

GHQは戦後直後に再結成された青年会や婦人会から、国防婦人会的な御用団体的体質を革去し、指導者に盲従しない自主的に「考える農民」の育成を重視した。いずれ高度経済成長期の歴史に関し、電気洗濯機や掃除機、テレビや電気釜・冷蔵庫などの普及を、家電企業側の発明とマーケティングのみで論じる研究が増えていくだろうが、高度経済成長の陰で埋もれてしまいがちな、「普通の人びと」の生活実践を、少なくとも私たち民俗学者は、生活者の側の視点から見聞きしている。

だが、その運動を担った世代は高齢化し、今が当事者からの聞き書きや、課題化するラストチャンスともなっている。彼らが自らを農村民主化の主人公と自覚し、積極的に身の回りの改善を行ったのは1950年前後から1960年代前半に限定される。韓国でも戦前の運動を引き継いだ1970年代のセマウル運動を、ポジティブに経験した世代は激減し、国民党台湾移転後も人民公社が生活改革を担った中国でも、1978年の生産責任制導入以降1983年までに公社は解体されている。その後のスローガンのない時代、「普通の人びと」がいかに生活を秩序化していったのか¹⁴も、重要な研究課題であり、それらが結局のところ、現在の「いま、ここ」に及ぶものの、深町が問題提起したように、国家が深刻な内憂外患に直面した国難の最中に、なにゆえ挙止動作をはじめ、日常習慣の改善という皮相・些末とも思われる運動が発動され、大衆を駆り立てた全国的運動となり得たのか[深町 2013: 7-8]、この“なぜ”をまずは具体的に検討する。

簡易水道の設営や蠅・蚊・鼠など家庭害虫の駆除、改良かまどをはじめ台所改善や料理講習会、浴室や便所・排水の改良といった保健衛生事業、時間厳守や起居振舞の改良、冠婚葬祭の簡略化や因習の打破、さらには出産調整・避妊方法の指導講習会など、その活動は多岐にわたるが、農林省の生活改良普及員や農業改良普及員、厚生省の保健婦といった多様なアクターとの関係性も、その実態は既に不分明になりつつある。それらが、どのようなプロセスや発生機序で、各地域、各家庭に導入され、消費されていったのか、さらには日中韓の比較対照から、何が一致し何が相違するのか、「普通の人びと」の生活経験の記述を厚く深めていく。韓国のセマウル運動、日本の蚊とハエのいない生活、中国のトイレ革命と年代や場面はずれてはいるが、「普通の人びと」が自らの「生」を高めようとする運動として、何気ない立居振舞いといった当たり前にあった日常の「生活」という領域を、自覚的に捉え、己の「生」を活性化していったことは、特筆されるべき同時代的なエポックであった。

2. 「日常」—概念/それぞれの受容と展開

二日目午前中の第Ⅱ部では「日常」概念の、日中韓それぞれの受容と展開・発展を考える。本研究プロジェクトでは、これまで「日常」という概念に対し、明確な定義を与えないまま進めてきたのは、ハルトゥーニアンが一大パノラマを繰り広げたように、多様なアプローチが想定されたからであり、その広がり制限しないためであった。しかし、その背後には、ドイツ民俗学の「日常」概念があったのは言うまでもない[李 2015]。

革新的な概念として1970年のファルケンシュタインの原則以降、1980年代末にかけて「日常(alltag)」が展開したことは、カローラ・リップ[Lipp 1993]が詳論しているが、社会学や歴史学との境界において日常文化研究が豊かさを増していった。「労働者文化(Arbeiterkultur)」といった日本では馴染みのない領域における研究蓄積が、「日常」概念を共振させていった事情なども論じられているが、それぞれの国の実情が日常研究の展開に与える影響が大きいと考える。

知っている例で言えば、韓国の場合、国立歴史民俗博物館のサルリムサリ研究とそのアーカイヴに関しては以前紹介したので省略し[岩本 2015、金 2016]、ソウル市立のソウル歴史博物館の研究を紹介する。2014年から2017年の特別展からピックアップすると、前回シンポジウムのテーマともなった積層型集合住宅を扱った「アパートの人生」をはじめ、「ソウルの肉屋」「応答せよ1994年その後の20年」^{シンリムドン}「新林洞の青春—考試村の日常」「世界を印刷する仁 峴洞印刷路地」^{インヒョンドン}「マンションの森と化した北ソウル」「南大門市場」といった大胆な企画が目白押しに開催されている。日常あるいは日常的な企画が毎年ほぼ定期的に複数回開催され、ハンゲル版のホームページからは、それらの展示カタログ(e-book)が無料で入手できる。中でも、予備校とその予備校生らの下宿街の日常を描いた新林洞の青春という民族誌は、秀逸である。

では、民俗学における「日常」とはいかなるものか、簡単にドイツ民俗学のヘルゲ・ゲルトの入門書から引くと、以下のようなになる。

「民俗学は、幅広い層の住民集団の日常の生活を扱う学問である。そのまなごしは、過去および現在における文化の表出に向けられる。民俗学が問うのは、多くの人びとが当たり前のこととして見ている事柄が、なぜ、当たり前のこととされているのかということである。つまり、私たちと生活空間・経験空間を共有する人間が、その自らの存在を、現在いかに形づくっているのか、また過去においていかに形づくってきたのかということを問うことでもある」[Gerndt 1997: 25]

単に日常生活を問うだけでなく、当たり前になるプロセス(日常化)を問いかける視線が、そこには内在している。発表ではアルブレヒト・レーマンの「日常の語り」についても、改めて俎上に載せたい¹⁵。「普通の人びと」のありきたりの生活という(研究)対象としての日常だけでなく、ここには(日常に埋没している)当たり前をいかに捉えるのか、という方法としての日常という問いも内包する。ドイツの日常も、それぞれの国の民俗学では受け止め方が違う。どのような受容の形があるのか、本シンポジウムでは、プラットフォームとして相互のすり合わせができればと期待している。

3. 「世相」—方法/変化する日常どう把握・記録するか

二日目午後の第Ⅲ部では、「世相」と題し、方法として変化する日常を、どう把握し、いかに記録するかを検討する。ゲルトの規定をみてもわかるように、当たり前になるプロセスという、変化を含み込んだアプローチであることは確かであるが、問題は「いま、ここ」をいくら民族誌的に記述しても、それらは瞬く間に、「過去のあそこ」へと変質してしまう点にある。

一方、いうまでもなく「世相」とは、柳田の世相篇のそれである。初出は齋藤隆三『元禄世相志』(博文館、1905年)による造語であるから、中国や韓国ではこの漢字語は通じない。漢字語圏で通用していた近い言葉は、「世態」という語であるが、「世相」は時代精神や社会状況、また風俗に共通する時代的な特徴や全体的な「相」を表す新語として用いられている[岩本 2002]。柳田も世相

篇を「世の移り変わり、すなわち風俗の書として書いたもの」だったとしたが[柳田 1954: 3]、常に変化していく日常の、移り変わりに焦点を当てた用語だと言ってよいだろう。

「いま、ここ」という即時的で過ぎ行く日常と、「眼の前の新しい現象との、繋がる線路を見究める」[柳田 1993: 19] という世相史的な日常とを、いかにとり結ぶことが可能であるか、前者の研究を、時間不定で、現住所不明の、所在地不明な民族誌にしないためにも、そこを目標けた討議が必要となってくる。

日本の登壇者以外は、あるいは日常の変化や世相への言及は薄いかもしれない。しかしながら、そこで論じられる「生活世界」や「生世界」「空間的实践」という語は、個人だけに閉ざされている世界ではない。外部との繋がりがなくしては、生活を成り立たせることが不可能であるため、それらの考察からは個人だけでなく、その個人と繋がりを持った人間関係や社会までもが見えてくる。「生活世界」とは判断以前の個人の知覚的・直観的な環境であるだけでなく、主観が他者たちと共に生きている相互主観的な、間主観的なコミュニケーションの織り成す、文化の沈殿した、日々の日常実践が累積した歴史的な世界でもある。

おわりに

今回の議論だけですべてを語り尽くすことは不可能である。しかし、「いま、ここ」に足跡を残すことが、ハルトゥーニアンが強調した「日常性」Everydaynessそのものなのであり、私たちの未来を書き換える生きられた経験にほかならない。

彼は「都市の日常性が生産したさまざまな記号は、生きられた現在の個別の経験とその歴史的差異の特徴として、ひとつの『残像』、かつて現働化されたものの痕跡——そのなかでは現在が新たに異なった配置で現働化する——として理解する必要がある」[ハルトゥーニアン 2011: 54]と論じる。「残像」とは「かつて現働化されたものの痕跡」であり、現在、それを異なった配置で現働化することとは、文化¹⁶をヴァナキュラーに再配置していく生活実践のことだと換言できる。

そして彼が、「日常性が意味していたものとは、現在のなかで待機している過去を《いま》が現働化する仕方であった。それは、ハイデガーのいう『既在性』ではなく、『忘れられたが、しかし忘れえないもの』であった」[ハルトゥーニアン 2011: 55]と説くのは¹⁷、次のように解釈できる。「現在のなかで待機している過去を《いま》が現働化する仕方」とは、常に過去=文化を参照基準にしながら、現在の「いま、ここ」を生きていく人びとの日常実践やアクチュアリティのことを指している。過去を悪しき亡霊としないためにも、日常性の「いま、ここ」が起点とされなければならない。

注

- 1 英文原典では同じ2000年に刊行された、『近代における超克一戦間期日本の歴史・文化・共同体』[ハルトゥーニアン 2007]の方が、具体的に詳しく、日常性思想の世界史的な同時代性を大局的に主題化した『歴史の不穏』とは、対の研究書となっている。
- 2 柳田に関しては、[ハルトゥーニアン 2011]よりも、

「国民の物語、亡霊の出現—近代日本における国民的主体の形成」[ハルトゥーニアン 2010]の方が詳しく、柳田や民俗学を中核にして議論が繰り広げられている。『都市と農村』や『明治大正史世相篇』を高く評価しながらも、注4で述べるのと同様な意味で、民俗学自体は折口信夫とともに文脈化された箇所では、「亡

- 霊の出現」と位置づけている。
- 3 ハルトゥーニアンおよび訳者はモダニティという語と「近代」という語を、使い分けている。河上徹太郎はじめ13人の評論家によって1942年に開かれた座談会「近代の超克」を主題に論じた前掲『近代による超克』で、「近代という用語が、芸術、文化、政治的なレジームの固有性を覆い隠そうとするものである」とする[ハルトゥーニアン 2007: viii]。
 - 4 彼はまた、資本主義的な分断と断片化する生活の中で、「一体化を再獲得できるような偽りの約束を振りまく言説も生まれてくる。『永遠性』という理念への衝動は、工業化しつつあった1920年代や30年代の世界中では、ナチズムのような永続する民族共同体への確信とか、歴史を超越した理念や価値の能力を信じる観念論哲学とかに見られる『崇高なる自己欺瞞』(マックス・ホルクハイマー)として具体化した」と論じる[ハルトゥーニアン 2011: 7]。
 - 5 戦後、米軍USCER支配下の沖縄で行われた生活改善普及事業は、加賀谷真梨によれば、大学を普及事業の拠点にするなど、アメリカ型のHome Living Improvement Research and Extension Programの影響が多であると指摘する[加賀谷 2017]。日本本土の場合、戦前のヨーロッパの生活合理化運動(簡易生活)を手本とした生活改善運動が基盤となって、戦後の農林省の生活改善普及事業と、総務省系の新生活運動に接続・展開したと、ひとまず理解しておく。
 - 6 日本植民地期における台湾先住民に対する生活改善事業については[山路 2004]がある。
 - 7 GHQの指導の下、農家生活の合理化を目指し、1948年の農業改良助長法(法律第165号)の施行によって、農林省により全国的に展開したとする説明が、最も一般的である。
 - 8 近年、それらのモデルは開発人類学的にも応用され、東南アジアやアフリカなど、世界各地の開発の現場でカイゼンが繰り返されているが、それについては[太田 2004]に詳しい。
 - 9 朝鮮総督府『生活状態調査』は地域編が水原郡1929年から7冊刊行されているが、計量的な地域分析がなされている。台湾でも本土の国勢調査に先駆け、1904年「臨時台湾戸口調査」が開始された。
 - 10 日本の植民地下における運動としては、1932年以来朝鮮総督府・宇垣一成総督によって推進された農山漁村振興運動の影響が絶大であったが、1929年に朝鮮日報社が行った「生活改新運動」と1931年に開始された東亜日報社の「ウ・ナロード運動」の啓蒙的な触発と、それに導かれた民衆運動も重要である。前者では健康増進・消費節約・虚礼廃止・早起き運動・色衣断髪・常識普及の6項目が強調されたが、文字普及運動に衣替えした。後者も主眼は文字と数字の啓蒙であったが、いずれも総督府の圧力で中断した[松本 1996、宮本 1998]。またこの時期、1934年、総督府中枢院が家庭における儒教式冠婚喪祭を整理して規程した「儀礼準則」は、1973年朴正熙大統領期に制定された「家庭儀礼準則」(大統領令第6680号)へと継承され[丁 2014]、今日の韓国の庶民生活にまで影響を及ぼしたものとして特筆される。
 - 11 そのほかに、社会デザイン学の領域においては、[小関 2015]による専業主婦によるカイゼンに焦点を絞った考究もあるが、社会教育学の分野における先行研究である[久井 2008]は、対象の外延に関して大いに参考になった。また建築学の分野における生活改善運動に関する論文は、大正後期のそれが都市の新中間層の生活の「模範」を示す形で展開されたことから、それに関しては枚挙に暇ない。ここでは今和次郎に関する[黒石 2015]に言及をとどめておく。
 - 12 生活に焦点化した議論は、生活改善に関する先駆的な研究である[中野 1974]以降、あまり議論が進んでいないように思われる(脱稿後、久井[2016]を閲覧した)。生活合理化という言葉が流行したのは、小関孝子によれば1930(昭和5)年からで、文化的な暮らしのためであれば、消費や娯楽も奨励していた生活改善運動は、関東大震災後になると、生活の簡素化へと論調を変化させた[小関 2015: 89, 64]。
 - 13 民力涵養運動とは1919年3月に床次竹次郎内相から各府県知事宛に発せられた訓令を契機に始められた、五大要項を基軸とした戦後経営事業の総称で、これに関しては拙稿[岩本 2008]を参照のこと。
 - 14 中国の人民公社への連続性と其後のスローガンなき生活改良の実践という課題は、田村和彦氏の教示による。
 - 15 レーマンに関しては[レーマン 2010、岩本・法橋・及川編 2011]などを参照のこと。
 - 16 彼は「生きられた経験の条件を形づくっていた事物の細部」が重要で、そのような事物の細部が「日常生活に入り込んでくる」とも述べている[ハルトゥーニアン 2011: 54]。
 - 17 これに続けて彼は、「日常性とは不^{ディスクワイエット}穩の形式であり、宙吊りにされた瞬間なのである。それは新しい現在であり、伝統を暴力的に中断し、過去の描く流れや運動を宙吊りにする『歴史的状况』なのだ」[ハルトゥーニアン 2011: 55]と論じる。

参考文献

- 李相賢 2015 「ドイツ民俗学と日常研究—ドイツチュービンゲン大学民俗学研究所の村についての日常研究を中心に」(中村和代・訳)『日常と文化』1号
- 岩本通弥 2002 「世相」小松和彦・関一敏編『新しい民俗学へ—野の学問のためのレッスン26』せりか書房
- 岩本通弥 2008 「可視化される習俗—民力涵養運動期における『国民儀礼』の創出」『国立歴史民俗博物館研究報告』141号
- 岩本通弥 2011 「家族をめぐる二つの生活改善運動—民力涵養運動と新生活運動」田中宣一編『戦後農村の生活改善事業と新生活運動』農文協
- 岩本通弥・法橋量・及川祥平編 2011 『オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて』成城大学グローバル研究センター
- 岩本通弥 2015 「“当たり前”と“生活疑問”と“日常”」『日常と文化』1号
- 太田美帆 2004 『生活改良普及員に学ぶファシリテーターのあり方—戦後日本の経験からの教訓』独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所
- 小関孝子 2015 『生活合理化と家庭の近代—全国友の会による「カイゼン」と「婦人之友」』勁草書房
- 加賀谷真梨 2017 「沖縄における生活改善普及事業の展開と受容」生活変化/改善研究会、2017年4月15日発表
- 金賢貞 2016 「韓国民俗学は「当たり前」を捉えうるか—韓国国立民俗博物館の二つの民族誌(2007～14年)を中心に」『日常と文化』2号
- 樹本健 2011 「訳者あとがき」ハリー・ハルトゥーニアン『歴史の不穏』(樹本健・訳)こぶし書房
- クラカウアー、ジークフリート 1979 『サラリーマン—ワイマル共和国の黄昏』(神崎巖・訳)法政大学出版局
- 黒石いずみ 2015 『東北震災復興と今和次郎—ものづくり・くらしづくりの知恵』平凡社
- 丁世絃 2014 「近代期の韓国における儒教儀礼の変化」『東アジア文化交渉研究』7号
- 中野邦 1974 「大正期における『生活改善運動』」『史艸』15号
- 中野邦 1975 「大正期の生活論」和歌森太郎先生選歴記念論文集編輯委員会編『明治国家の展開と民衆生活』弘文堂
- パウジンガー、ヘルマン 2005 『科学技術世界のなかの民俗文化』(河野真・訳)文芸堂
- ハルトゥーニアン、ハリー 2007 『近代における超克—戦間期日本の歴史・文化・共同体(上・下)』(梅森直之・訳)岩波書店
- ハルトゥーニアン、ハリー 2010 「国民の物語、亡霊の出現—近代日本における国民的主体の形成」キャロル・グラックほか『日本歴史25日本は何処へ行くのか』(樹本健・訳)講談社学術文庫
- ハルトゥーニアン、ハリー 2011 『歴史の不穏—近代、文化的実践、日常生活という問題』(樹本健・訳)こぶし書房
- 久井英輔 2004 「大正後期・昭和初期の生活改善運動における〈都市〉と〈農村〉」『東京大学大学院教育学部紀要』44巻
- 久井英輔 2008 「戦前生活改善運動史研究に関する再検討と展望—運動を支えた組織・団体をめぐる論点を中心に」『兵庫教育大学研究紀要』32巻
- 久井英輔 2012 「大正期の生活改善における〈中流〉観の動向とその背景」『広島大学大学院教育学部研究科紀要』61号
- 久井英輔online 「大正・昭和初期における生活改善運動の概観」『生涯学習研究 e 事典』、最終アクセス日:2017年4月20日:
<http://ejiten.javea.or.jp/content.php?c=TWpRek5qTXo%3D>
- 久井英輔 2016 「生活をめぐる啓蒙と〈中流〉の近代史—大正・昭和初期における生活改善運動に関する検討を中心に」青山学院大学大学院教育人間科学研究科博士論文
- 深町英夫 2013 『身体を躰ける政治—中国国民党の新生活運動』岩波書店
- ベンヤミン、ヴァルター 2015 『[新訳・評注]歴史の概念について』(鹿島徹=訳・評注)未來社
- 松本武祝 1998 『植民地権力と朝鮮農民』社会評論社
- 宮本正明 1998 「植民地期朝鮮における「生活改善」問題の位相」『史観』139号、早稲田大学
- 森本厚吉 1921 「呪ふべき二つの生活」『文化生活』1巻3号
- 柳田國男 1954 「総説」柳田國男編『明治文化史—風俗編』洋々社
- 柳田國男 1993 『明治大正史世相篇』講談社学術文庫(初出:1931、朝日新聞社)
- 山路勝彦 2004 『「文明化」への使命と「内地化」』『台湾の植民地統治』学術出版会
- レーマン、アルブレヒト 2010 「意識分析—民俗学の方法」(及川祥平・訳)『日本民俗学』263号
- Gerndt, Helge, 1997 *Studienskript Volkskunde*. Waxmann (ヘルゲ・ゲルト1997『民俗学研究法』)
- Lipp, Carola, 1993 *Alltagskulturforchung im Grenzbereich von Volkskunde, Soziologie und Geschichte. Aufstieg und Niedergang eines interdisziplinären Forschungskonzepts. Zeitschrift für Volkskunde*, 89.Jg., (カローラ・リップ 1993 「民俗学、社会学、歴史の境界領域としての日常文化研究—学際的な概念の上昇と下降」『民俗学雑誌』89巻)